『しまなみ海道』と瀬戸内海方言の東西流通

灰谷　謙二

はじめに

通称「しまなみ海道」（西瀬戸自動車道）は1999年５月、尾道市と今治市を結ぶ瀬戸内海横断道路として完成した。「しまなみ海道」によって地域交通網に大きな変化がおこると、地域にすむ住民の生活、社会状況にも大きな変化が起こる事が予測される。方言も例外ではない。

瀬戸内にあってある程度の類似性をもちつつ、島ごとの違いもあったこの地域が、道路で結ばれる事でなんらかの変化をおこしたのであろうか。あるいは影響はなかったのであろうか。あるとすればそれはどのような形で起こるのか、尾道と今治のどこに方言の切れ目があるのか、しまなみ海道が開通した今、その切れ目はどうなっているのかを、具体的に次の三つの観点から考えてみたい

１．瀬戸内海の方言は東西南北の流通経路のなかでどのように分布しているのか。

２．この動きを「しまなみ海道」の尾道から今治へのルートを軸に眺めるとどのような分布として現れるか。

３．橋がかかったことによって言葉は変化したのか、しなかったのか。

１．前提としての備後方言の動向

前提として、安芸と備後の対立で考えた備後方言が、広島県方言全体のなかでどのような動きをしているのかを把握しておきたい。

図１は、「嘘ばかり言う」とか「雨ばかり降る」の「～ばかり」の方言分布を示したものである。図２は、「とうもろこし」について、町1987の安芸と備後の接境域のデータを整理して作り直したものになる。図１では、東側に備後弁のバーが、西側に「バッカリ」が分布しているようすがわかる。注目されるのは、その境目の北と南がそれぞれすこしずつずれていることである。南は広島側へ、北は岡山側へ少し入り込んでいるようすがわかる。島筋では備後のことばが東から西へながれ、山側では安芸のことばが東へ進んでいくという動きになっている。図２の「とうもろこし」の図は、南北と中央部、マンマン系・トートコ系・コーライ系が３層にかさなる。マンマンなどは、安芸山間部ではマンマンキビ系がよく聞かれ西に濃い語形である。

図１　雨ばかり（友定2000より）

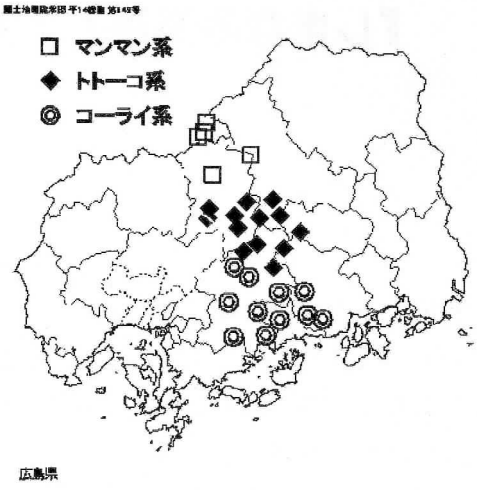

図２　とうもろこし（町1987をもとに作図）

この両図に直接の関係はないが、ほかにもこのようなパターンになる多くの方言の動きとあわせて考えていくと、広島県方言の大きなゆっくりとした動きがみえてくる。

町1987ではこの対立状況のいくつかのパターンを整理し、その原理を東西の対立がねじれて回転し南北の対立になっていく動きとみている。

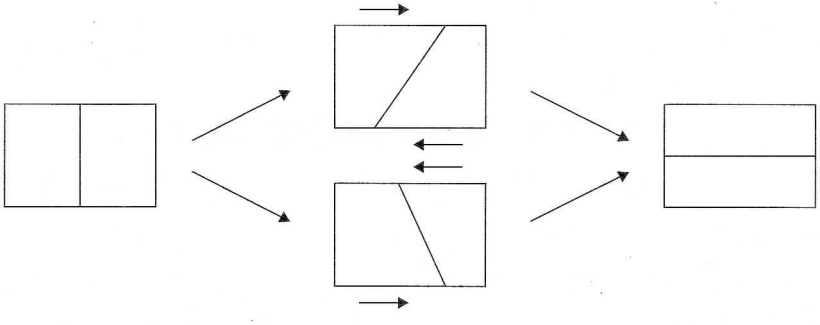

図３　東西から南北への動きの解釈（町1987を灰谷が整理）

つまり、最初は東西の対立として存在した境界線が、ねじれて回転し、南北の対立になっていくという考え方である。

図４のように中国山地側では九州側から関西方面への「上り」の動きがあり、瀬戸内海側で関西方面から九州方向への「下り」の動きがあって、それが広島方言の「右回り回転」のもとになっているということになる。

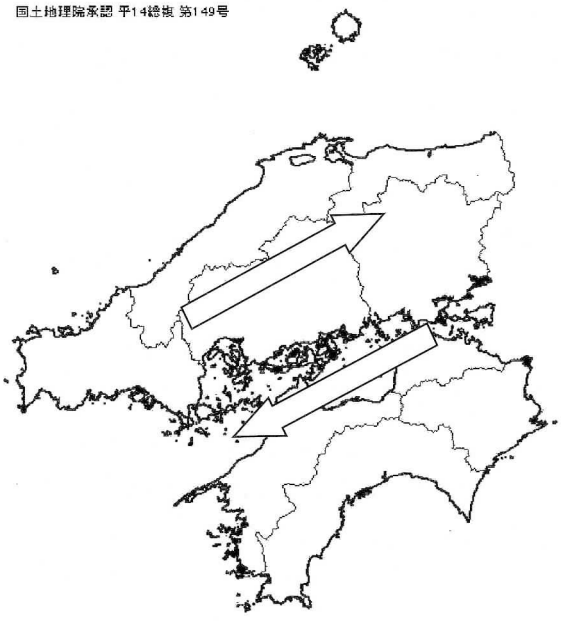

図４　中国山地と瀬戸内海の動き

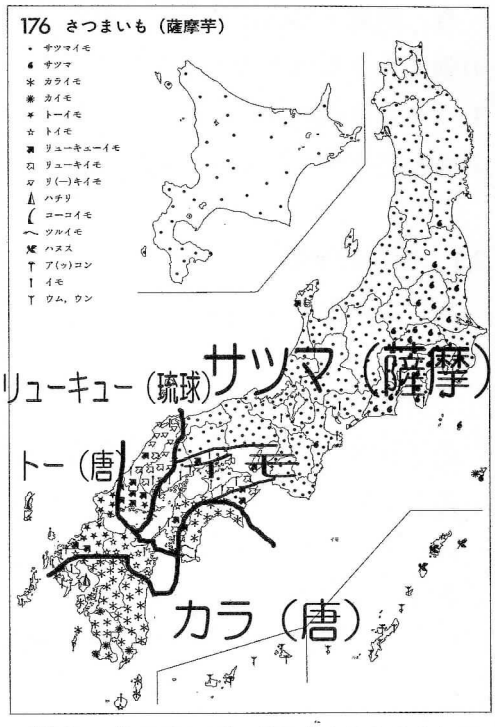

図５　さつまいも（『日本方言大辞典』下 p2551に筆者が加筆）

方言が中央から周辺部に進むだけではなく、周辺から中央に向かう動きがあることは、図５「さつまいも」の分布を見るとよくわかる。唐・琉球・薩摩と、この芋がどこからきた芋かをしめした名前になっている。九州は唐・中国から、中国地方は、琉球から、関西より東は薩摩からきたと理解していることになる。流れは東へさかのぼるものであると考えられる。このながれのなかで瀬戸内海だけが「イモ」といっていることが注目される。おそらくこれは山側とちがう独自の動きで、内海でのイモ栽培の爆発的普及が、一般名詞としてイモと単純にいえるようになるという特殊な事情によるものだと思われる。ここにも山側と海側のことばの対立がみえる。

２．しまなみ海道を中心に見た過去の瀬戸内方言の動き

前項で、東西の流れの行き着いた結果を南北の対立と考えた。そして瀬戸内海側で関西から九州方向への言葉の流通経路があり、中国山地側で、九州側から関西方向への言葉のながれがあると解釈した。ではこの海沿いの動きを、しまなみ海道を軸にみるとどうなるかが問題になる。

今、尾道・今治ルートを、通称に従い「しまなみ海道」と呼ぶ。一つは、この東西の強く大きな流れのなかで、このルートでことばが南北にわたっていった面がある。もう一つは連続性ではなく、本州側と四国側の対立として現れる面がある。この二つの面を方言地図によって確認してみたい。

2.1　通路的役割

瀬戸内海を南北に縦断する動きについて、藤原1990では次のように述べている。

当該地域の南北流通について、内海中部での、備後路から伊予路へにかけての、芸予叢峰、島づたいでの通路は、はっきりしとした北→南の流通をとらえしめるものとして刮目される。「遊びばかりして」などと言われる時の、「ばかり」の「バー」は、まさに備後のおはこである。（中略）このものが備後本土つづきの、内海の島々にもよくおこなわれていて、伊予本土ぞいの島ともなると、これが「バイ」「バーイ」とあり、伊予本土北端域でも「バイ」「バーイ」がある。

他の香川島嶼部、山口周防本土から伊予中部、淡路島といった瀬戸内海を南北にわたる諸ルートの中で、とくにこの備後から伊予へのルートが大きなものであることを図６の状況をもとに指摘されている。図６「雨ばかり」の「ばかり」では、備後的特

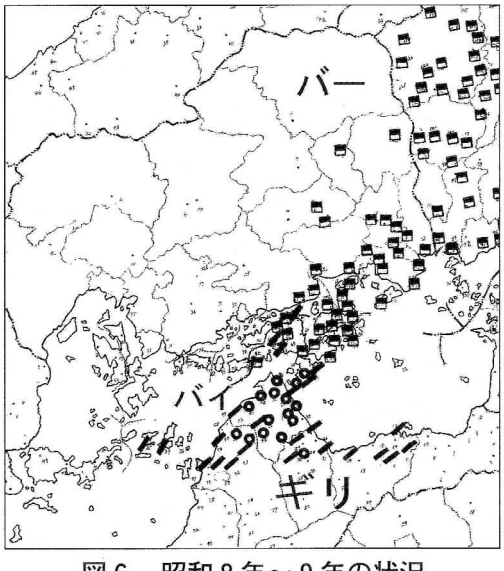

図６　昭和８年～９年の状況
（藤原1990より）

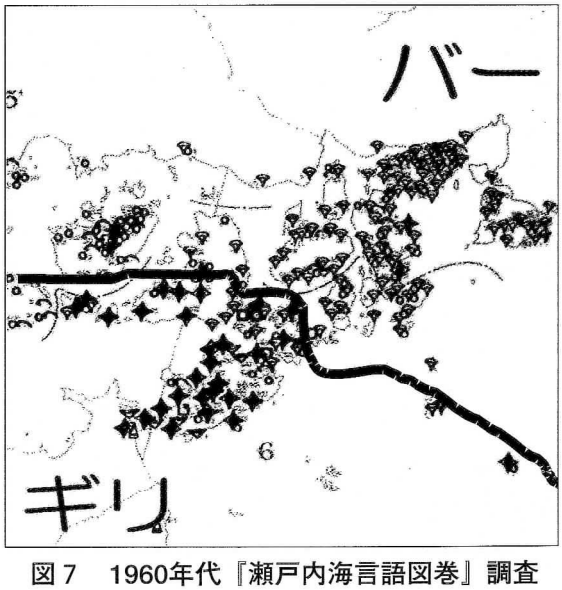

図７　1960年代『瀬戸内海言語図巻』調査
（藤原1974より）

徴をもつ「バー」がしまなみ海道添いに南下している状況がわかる。この図の前提になった調査は昭和８年から９年にかけて通信で行われたものである。1960年代に行われた『瀬戸内海言語図巻』調査のこれとおなじ項目「雨ばかり」では若干分布事象が異なってきている。図７をみると備後のバー類に対して伊予陸地部にあったギリが北上し、大三島南部から大島・伯方島あたりまで張り出している様子が分かる。これに関しては、調査方法等のちがいもあって伊予本土のギリが昭和初期から30年ほどのあいだに急速に北上したと判断できるかどうか確かではない。しかし、すくなくとも島が南北の言語流通の経路として働いている様子は確かめられよう。

もうすこしはっきり、ここが言語の通り道になったという様子のわかるものをみてみる。まず備後ないしは伊予独特の方言現象であってこれがしまなみ海道域のなかだけで南下あるいは北上していることが確認できる項目と言うことになる。もし、おなじものがさらに東や西の地域にもひろがっていれば、東西方向のものだと考えておかなければならない。これを考慮して、この地域がはっきりと通路としての性格を見せた項目は図８の「松かさ」である。

図８　「しまなみ海道」が言葉の道になっていたと見られる分布（藤原1974より）

西のフグリ、東のマツカサ・マツフグリに挟まれる形で、ツングリがしまなみ地域内にまとまって分布している。このように東西の流れに影響されることなくこの地域だけで備後から伊予までの通路がいわば「貫通」した状態をみせるものは、この地図集のなかでもこの１枚のみである。それだけに、このしまなみ海道地域の通路的性格は、希に特殊な形でしか現れるものではなかったと考えておいた方がよさそうである。

このような南北方向の言語流通がはっきりと認められる分布図は結論的にいえばほとんどなく、やはり瀬戸内における言語流通の基本は東西流通ということになる。このうち本州寄りのルートと四国寄りのルートの２本がありこれが平行に張り合いながら分布を形成し、結果的にこの地域にいくつかのパターンの南北分布を見せているというのが基本であろうと思われる。

2.2　二つの流れのなかで分断される「しまなみ海道」

瀬戸内海が古来、東西を結ぶ重要な交通路で物流上の動脈であったことはいうまでもない。言語においても同様である。この東西流通路にも、本州南側と、四国北側添いの通路つまり、海岸に沿いながら進む通路と、沖にでて島をぬう通路があった。古瀬2002では沿岸沿いルートが一般に「地乗り」と呼ばれることに対応して、島添いのルートを「沖乗り」と呼び瀬戸内海域の古代海上交通と祭祀の関係について明らかにされている。ここではこの「沖乗り」の本州寄りの流れと、四国寄りに多くは周防につながる流れを認めて「芸予沖乗り」「防予沖乗り」ルート沿いの言語分布についてのべてみたい。

2.2.1　芸予沖乗りルート分布

まず、芸予沖乗ルートといえそうな分布からみてみる。図９「露」をみると、ツユが全域に分布する中で、ツイが本州添いに広島湾、江田島・能美島あたりまで分布する。このながれの中で「しまなみ海道」は因島・生口島の広島県側と、大三島・弓削島・生名島・岩城島の北寄りの島が一体になり、愛媛県側の伯方島・大島と対立する。

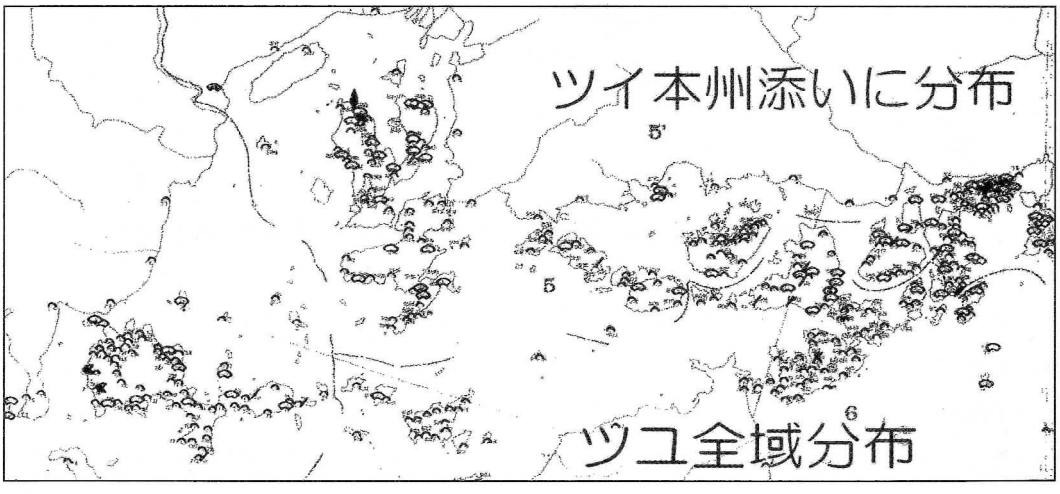

図９　本州添いに広島湾、江田島・能美島あたりまでことばが流れる分布（藤原1974より）

この状況では東西方向の流れが南北の島づたいの流通を消してしまう。逆に言えば、ここでみられた南北対立が消えて貫通する状況があれば、橋がかかったことで南北流通が強くなり影響力を発揮したと確認できることになるであろう。

2.2.2　防予沖乗りルート分布

次に防予沖乗りルートといえそうな分布をみてみる。内海航路でいう、伊予から周防大島へ向かう「防予沖乗り」ルートがある。方言の分布の流れにも、これが重ねられるものがある。先の「芸予沖乗り」ルートと平行し南側に分布が展開する。ここでは図10「とうもろこし」の分布を見てみる。

コーライ系の語が瀬戸内海中央部から本州沿岸沿いに分布している。その一方で、四国沿岸から周防大島へ連なるルートでトーキビが分布する。

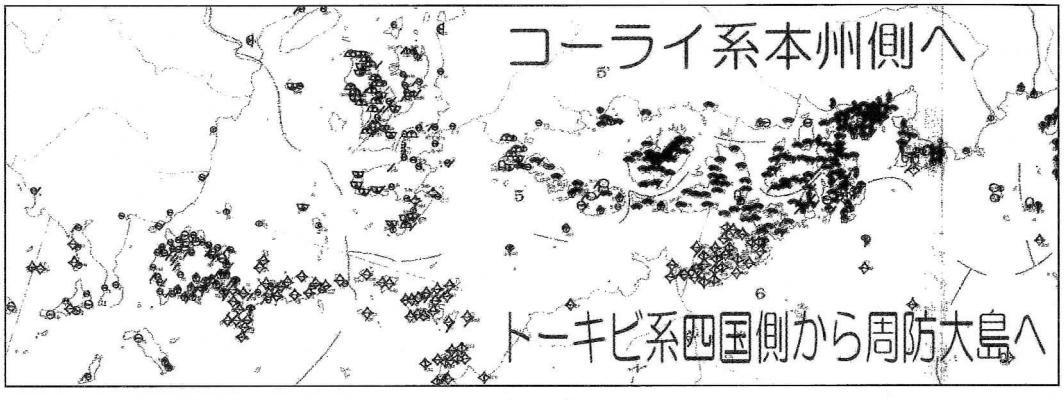

図10　四国沿岸から周防大島へ連なるルート（藤原1974より）

これについて友定2001では東から西にナンバン→コーライ→トーキビと順に分布しており、しかも本州側のナンバン・コーライの西進が早いというルートによる伝播速度のちがいであると説明されている。

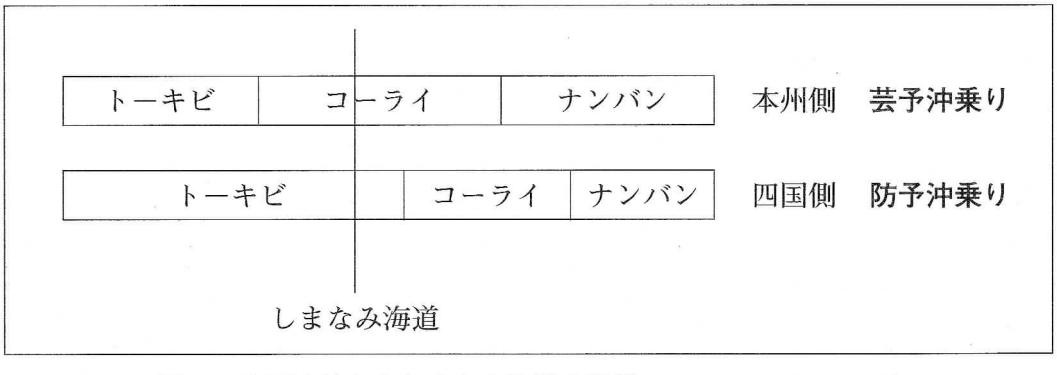

図11　東西の流れとしまなみ海道の関係（友定2001を参考に作図）

トーキビの分布にコーライがかぶり、ナンバンが追ってくる。この北寄りルートと南寄りルートが同じスピードではなくすこしずれている。本州側のほうがすこしコーライ・ナンバンの進み方が早いということになる。そして、ちょうどコーライとトーキビがずれて分布するところに、南北の「しまなみ海道」の線が走っていることになる。その四国筋と本州筋の境目が伯方島と大島の間に引かれることになろう。

ここまでみた、この地域における方言の伝播状況をまとめると次の３点に集約される。

1）基本的に、瀬戸内海の一体性のなかでこの地域は一体になる傾向がある。
2）備後から伊予にかけての言語の流通路として「しまなみ海道」が成立していたことが確認できる。ただし、これが今治まで「貫通」するケースは希である。
3）大きな東西の言語的流通路、すなわち「芸予沖乗りルート」と「防予沖乗りルート」の二経路があり、これが結果的に当該地域の方言分布を二分する。そのばあい、大島・（時に伯方島まで）が南部分布域となり、大三島・伯方島・岩城島・生名島・弓削島は北よりの流れの中で生口島・因島・向島と一体化しやすい。

橋がかかることのことばへの影響力について考える場合に、注意すべきは、架橋によってつくられる生口島から大三島へのルート以外に、海ルートの弓削島・生名島・岩城島へのルートがあることである。橋のルートから外れたこの三つの島の言語変化がどのようなものになるか。大三島とともにみせていた山陽側との一体性がどのように維持あるいは消失するかが問題となるであろう。

3．現在の状況

いままでみた分布は、調査年代からいえば、しまなみの架橋前の状況となる。架橋後の調査で、現在の状況について見てみる。結論的に言えば、橋の影響でことばが動いたといえるようなデータは出てこない。もとより先行調査とおなじ調査密度や調査方法で、追跡調査を正確にしないかぎり、変化の状況はわからない。『瀬戸内海言語図巻』調査は瀬戸内海全体の全有人集落を対象とした大プロジェクトであったから、これを同規模で実施するのは現実的に無理であろう。「しまなみ」の、主要地点にかぎった、調査項目も目的もことなる調査データであることを前提に話を進める。

一つは、アクセントの変化について、尾道側の東京式アクセントと今治側の京阪式

アクセントの対立がどうなったかをみてみる。尾道から今治方面にいくとアクセントが東京式から京阪式に変化する。この境界は大島と伯方島のあいだにあることが確認されている。これが現在どうなっているかという問題がある。もう一つは発音面の地域差の問題である。これは先掲の分布図とことなり、「しまなみ海道」の中央に異質なものがあるという結果になった。ともに共同研究者の報告にもとづくものでアクセントは佐藤2005、音声は有元2005の論考の結果をまとめるかたちで紹介する。

3.1　アクセントの変化（佐藤2005より）

図12　1970ころのアクセント対立状況

当該地域のアクセント分布については1970年頃この地域のアクセント対立状況についての集中的な議論があり、とくに、東京式のアクセントと、関西式のアクセントの境界線がどこにあるのかという点が論点とされ、伯方島が境界になるとしても、これが結局東京式と、京阪式のどちらのアクセントに属するのかということが問題になった。結論的には伯方島では北部は東京式・南部がやや京阪式的要素をもつ状況だということになった。しかしながら伯方島の人たちが、意識として、どこを自分の属する都会だと考えるかといえばやはり帰属意識は愛媛にあった。これは今もかわらず、高校生は進学も今治を希望する傾向が強い。この島にとっては、共通語と同じ東京式

アクセントの地域でありながら、より地位の高い、よいものとされる方言は今治・松山の京阪式アクセントだったという複雑な情況にあったことになる。そこに共通語化の波がかぶってくる。今治文化圏の伯方島は、あらためて共通語化しなくてももともと東京式アクセントであった。共通語化の意識は、田舎である伯方島よりもむしろ都会である今治のほうに強く働く。結果的にこの地域は、共通語を志向する都市部と、もともと東京式でありながら今治にあこがれる島嶼部というなかで、一方が一方をさげすむ事もなく親和的・融合的な関係をつくることになった。

今治の共通語化が過渡的な状況にあることを示すデータがある。一部の女子高校生にみられるものであるが、象徴的な現象としてあげてみる。「髪・唄・蝉・雪・足・親・夏・犬」などの単語のアクセントは、カ「ミ・ウ「タ・セ「ミとなるが、これを**カ┐ミ・ウ┐タ**　という。今治の伝統的なアクセントのままである。そして、同じアクセント型であるはずの「鉄」が「テ**ツ┐**が」と発音された。地元の「**テ┐**ツが」のアクセントを逆にすれば東京式になるものだと思い込んで作られたアクセントであろうと佐藤2005では推測されている。

このような状況をみると、かつてあった伯方島と大島の間のアクセントの南北境界線は、今治・大島が東京アクセント化へ向かう事によって、結果的に南へ押していく状況にあるといえる。ただ、これは島伝いに東京アクセントが南下したものとみることはできない。今治の共通語化と北側のもともとの共通語アクセントが合致したというところになり、架橋の影響ではないということになるであろう。

3.2　発音面の地域差（有元2005より）

つぎに発音面の地域差を先項同様に、有元2005をまとめる形で紹介する。こちらは、地点としては、６地点で、尾道、弓削、瀬戸田、大三島、大島、今治をとり、一本の線として、発音上の特色がどうあらわれ、どこで線が引かれるかを確かめたものである。弓削は下弓削、瀬戸田が中野集落、大三島は宮浦、大島は吉海仁江で調査している。ここであげた項目以外の音声現象についてもいろいろ調査されているが、ここでは分布パターンが典型的に現れている形容詞のウ音便に絞って述べてみる。「赤くなる、青くなる、濃くなる」をアコーナル、アオーナルという音の違い。濃いは、広島側ではコイーというが、これとどうからむかをみたものである。いくつかの細かい手順を経て、詳細な分析がされているものをこちらで単純化して示した。

「赤くなる」は尾道から瀬戸田までがアコーナル、大三島・大島がアコナルとなり、今治に渡るととまたアコーナルになる。アコーナルにアコナルがはさまれた形である。

<table>
<tr><th></th><th>尾道</th><th>弓削
（下弓削）</th><th>瀬戸田
（中野）</th><th>大三島
（宮浦）</th><th>大島
（吉海仁江）</th><th>今治</th></tr>
<tr><td>赤くなる</td><td colspan="3">アコーナル</td><td colspan="2">アコナル</td><td>アコーナル</td></tr>
<tr><td>青くなる</td><td colspan="3">アオーナル</td><td colspan="2">アオナル</td><td>アオーナル</td></tr>
<tr><td>濃くなる</td><td colspan="3">コユーナル</td><td colspan="3">コイーナル</td></tr>
</table>

図13　形容詞ウ音便の形態と分布

「青くなる」は尾道から瀬戸田までがアオーナルとなり、大三島以南がアオナルと短かくいう言い方が現れる。ただし今治ではアオーナルであり、厳密な形態は異なるが、概略的にいえばアオーナルがアオナルをはさんだかたちである。「濃くなる」に関しては、尾道から瀬戸田までがコユーナルであり、大三島以南がコイーナルとなった。したがって広島県側（尾道・下弓削・中野）と愛媛県側（宮浦・仁江・今治）に二分される。さらに愛媛県側が宮浦・仁江／今治に分かれるという状況になった。

しまなみ海道を一本の線と考えると両端（尾道・今治）が一致して、中央部が独自の動きをする。おそらくこの地域一面に広くおこなわれる発音の特徴の中で中央部に特殊なものがあって残存している状況かと考えられる。分布傾向で見たヒデリアメの状況とおおよそ一致する。このばあい北のヒガタリアメと南のヒガテリアメにヒデリアメがはさまれていた。

本論の問題にしている架橋とことばの関係で言えば、影響ははいまのところは認めにくいということになりそうである。

まとめ

以上述べてきたところをまとめる。

西瀬戸自動車道が開通して10年たつが、いまだ「生活道路」たりえていない状況にあるといえる。1960年ころの様子からくらべて、今、劇的に尾道と今治の方言が互いに接近するといった状況ではなさそうである。一般的にことばの変化、とくに方言と共通語の接触と影響は、いつも大規模で急速におこるように考えられてきたが、地域によっては案外に保守的だということにもなりそうである。共通語化のなかで急激な変化があった背景には、地方から都市へのある種のあこがれやそれをよいものとする意識があった。共通語を獲得しなくてはならない社会的なプレッシャーもあったであろう。しかし、これからの尾道と今治のあいだの社会・経済的な精神的なつなが

りのありかた、場合によっては、大きな力関係の差があって、一方がもう一方を飲み込む、あるいはもっとほかの強い力との対立のなかで一体感がうまれるということがあれば急激に状況がかわる可能性も否定できない。

今回分析の対象にしなかったが、この島嶼部一体は、橋でつながれるルート以上に、東よりの弓削まわりの海のルートが重要な線になっていた。橋のルートからいわば外れてしまったこのルートと西側の端のルートにどのような差が現れるのかも問題になろう。共同調査の中で行われた弓削高校での調査では、今治と広島のどちらへ行きたいかというと圧倒的に広島が多くなった。大合併による意識の変化の状況もあわせて、今後この地域の方言がどういう方向にすすむのかを、もうしばらく様子をみていく必要があろう。

参考文献

藤原与一　1974　『瀬戸内海言語図巻』東京大学出版会

町　博光　1987　『芸備接境域方言の方言地理学的研究』広島女子大学地域研究叢書Ⅷ

藤原与一　1990　『中国四国近畿九州方言状態の方言地理学的研究』和泉書院

藤原与一　1999　「瀬戸内海圏　環境言語学志向」『瀬戸内海圏環境言語学』室山敏昭　藤原与一編　武蔵野書院（P251）

友定賢治他　2000　『ひろしまのおもしろ方言集』松林社

友定賢治　2001　「方言の変容―瀬戸内海を例に―」『現代方言事情―消える方言、生まれる方言―』広島大学教務委員会　広島大学公開講座テキスト

古瀬清秀　2002　「瀬戸内海における古代海上交通と祭祀」『創立15周年記念事業瀬戸内海に関する研究』財団法人福武学術文化振興財団

佐藤栄作　2005　しまなみ架橋時代のアクセント―伯方島のアクセントを中心に―『「しまなみ」架橋　におる地域方言の変化（課題番号:14510447）平成14年度～16年度　科学研究費補助金（基盤研究（C（1））研究成果報告書　研究代表者高橋顕志）

有元光彦　2005　しまなみ海道地域諸方言におけるいくつかの音声現象について（同上）

灰谷謙二　2005　言語流通経路としてのしまなみ海道域方言―『瀬戸内海言語図巻』語彙項目地図より―（同上）